
《研究ノート》

Tennyson, Pierpont, Longfellow の詩における統語的に反響する鈴の音
—— 付、Shelley と Gray の類例 ——¹

笠原 順路

19世紀ヴィクトリア朝イギリスを代表する詩人 Alfred Tennyson (1809-92) が友人 Arthur Hallam の死を悼んで書いた長詩 *In Memoriam* (1850) につきのような詩編がある。教会で鳴らす除夜の鐘に呼びかけ、去りゆく年を弔い、新年に希望を託した詩で、*In Memoriam* の文脈から独立して、クリスマスから新年にかけて、今でもよく朗誦または歌唱されることがある詩編である。

Ring out, wild bells, to the wild sky,
The flying cloud, the frosty light:
The year is dying in the night;
Ring out, wild bells, and let him die.

Ring out the old, ring in the new, 5
Ring, happy bells, across the snow:
The year is going, let him go;
Ring out the false, ring in the true.

Ring out the grief that saps the mind 10
For those that here we see no more;
Ring out the feud of rich and poor,
Ring in redress to all mankind.

Ring out a slowly dying cause,
And ancient forms of party strife;
Ring in the nobler modes of life, 15
With sweeter manners, purer laws.

Ring out the want, the care, the sin,
The faithless coldness of the times;
Ring out, ring out my mournful rhymes

But ring the fuller minstrel in. 20

Ring out false pride in place and blood,
 The civic slander and the spite;
 Ring in the love of truth and right,
 Ring in the common love of good.

Ring out old shapes of foul disease; 25
 Ring out the narrowing lust of gold;
 Ring out the thousand wars of old,
 Ring in the thousand years of peace.

Ring in the valiant man and free,
 The larger heart, the kindlier hand; 30
 Ring out the darkness of the land,
 Ring in the Christ that is to be.

In Memoriam, 106

本稿で考察したいのが、2行目の文法構造——2つの名詞句 *The flying cloud* と *the frosty light* が、前後とどうつながるのか、という問題である。

*

入江直祐は、冒頭2行を次のように訳している——「鳴り飛ばせ、鳴り狂う鐘の音よ、荒れる空へと、／翔けてゆく雲を、冷たい光を」と。つまり、入江は、2行目全部を、1行目の *ring* の目的語と解していることになる。図示してみよう——

Ring out, wild bells, to the wild sky,
 vt. Obj. (The flying cloud, the frosty light)

なるほど、第2スタンザ以降の *ring* は、6行目の1例を除けば全て、はっきりと *ring out*; *ring in* が対になって他動詞として用いられている。それに合わせて読めば、確かに、この冒頭の *ring* も2行目全部を目的語にとる他動詞に見える。しかし、この解釈は、32行におよぶこの詩編を最後まで読んだ後に遡及的に考えて導き出せる解釈で、初読の読者にはわかるはずがない。しかも、もし他動詞だとすると、この *ring* は、呼格名詞句の *wild bells* と、*to the wild sky* という方向を示す副詞句を飛び越して、目的語があることになり、かなり *syntax* 構成上無理があるのではないだろうか？ 初読の読者が頼れるのは、*ring + out* という語との結びつきにおいてのみであり、その場合、最も妥当性があるのが、やはり普通の辞書に載っている次の自動詞の意味である。

ring vi. 1.b …鳴り響く 〈out〉 A shot rang out. 一発どんと聞こえた。

『研究社新英和大辞典』第6版

冒頭の動詞ringに目的語がないとするなら、つまりこのringが自動詞だとするなら、2行目The flying cloud, the frosty light は1行目のtoの支配を受けていて、the wild sky と同格と解するしかない。図示するなら ——

Ring out, wild bells,

^{vi.} [to] (the wild sky, / The flying cloud, the frosty light)

となる。確かに、flying cloud や frosty light は、荒れた空模様の特徴的な気象現象であり、この3つの名詞句が1行目の前置詞 to に支配されると考えた方がよさそうである。加えて、第1連4行目の ring out には明らかに目的語がなく自動詞であることからして、1行目の ring out も自動詞と解するのが、少なくとも1連だけからすれば、真っ当な読みのようだ。

しかし、その直後、第2連の冒頭に来るのが、これまた、明白な他動詞としての ring out である。しかも、以後、最終連にいたるまで、計32行のうち、このring out; ring in という表現がリフレインのように計20回（ring outが12回、ring inが8回）も繰り返され、この詩（verse paragraph）の基調をなすことになる。

他動詞としてのring outが基調をなす詩編において、冒頭スタンザの最初と最後に置かれたring outのみが自動詞（他に6行目のringも自動詞だが、outを伴っていない）であるという事実を、どう解釈すればよいか？ 入江直祐のように、第1スタンザの2つの自動詞ring outを、第2スタンザ以降の他動詞ring outに引きつけて読んでしまってもよいのだろうか？ 本稿は、飽くまでも語学的に素直に（＝ことばの通常の語義や用法に忠実に）第1スタンザの2つのring outの自動詞としての本来の読みを変更することなく、というより捻じ曲げることなく、その解釈からどのような効果が生じるのかを考え、類例を他の詩にさがそうという試みである。本稿執筆にあたっては、論文を構成するためのdocumentationに割く時間の不足から、また先行研究の希薄さからして、今後、類例を発見できる可能性も視野にいれて、取り敢えず現段階では研究ノートとして公にしておく。

* * *

鈴の音を描写した詩で、自動詞と他動詞の区別が不明確な詩が他にもある。クリスマスソングとして人口に膾炙している歌 —— 俗に“Jingle Bells”と呼び慣らわされている詩である。作者はJames Lord Pierpont (1822-93)、出版が1857年。当初は、クリスマスソングではなく、冬の戸外のそり遊びの歌で、“One Horse Open Sleigh”と題されていたとのことだが、今それは問題にしない。冒頭連のみ引用しよう ——

Dashing through the snow
 On a one-horse open sleigh,
 Over the fields we go,
 Laughing all the way;
 Bells on bob-tail ring, 5
 Making spirits bright,
 What fun it is to ride and sing
 A sleighing song tonight
 Jingle bells, jingle bells,
 Jingle all the way! 10
 O what fun it is to ride
 In a one-horse open sleigh

この詩は、12行で1つの連を構成し、4連、計48行から成るものだが、各連の最終4行は、同じ語句の反復からなるリフレインを構成している。筆者はかねがね、9-10行目の“jingle”が自動詞か他動詞か（つまり「鈴がなる」なのか「鈴ならせ」なのか——我が国で良く知られた宮沢章二訳でも、堀内敬三訳でも、「鈴がなる」となっている——）判然とせずにはいたのだが、今回、Tennysonのring outの一件で同種の例に遭遇したのをきっかけに、手始めに“Jingle Bells”の詩の全貌を見るべくWikipediaを覗いて見て、仰天した。（学生には論文での引用を禁じているWikipediaも、未知の研究分野の端緒をつけるのには、好都合で、本稿が「研究ノート」である所以の一つもそこにある。）

Wikipediaによると、James Fuldという音楽史家（music historian）が、「jingleは命令法である」と述べているのだ。Wikipediaが示している出典が入手できず、原典で確認してはいないものの、Wikipediaにこういう記述があるということ自体、jingleが直説法か命令法か判然としない人が多いということの証と考えてよからう。もし明らかに命令法であるなら、わざわざこのような註をつける必要はないからである。

このFuldの説を、文法構造に従って解説するなら、直説法の①「鈴がなる」ではなく、命令法の⊕「鈴ならせ」または⊖（もしjingleの後にコンマ（,）があるなら）「鈴よ、なれ」である、ということになる。これを動詞の自他の別で示せば、①=自動詞、⊕=他動詞、⊖=自動詞となる。これまた、Wikipediaの引用で恥ずかしい限りだが、jingleの後にコンマ（,）がある例は極めて少なく（但し皆無ではない）、当面①か⊕の可能性を考えるなら、直説法か命令法か分からない人が多いということは、我々の文脈で言うなら、自動詞か他動詞か分かりにくい、と言いかえることができよう。

一般に詩において、語法であれ意味であれ、(A)か(B)か判別しにくい場合、(A)と(B)両方の可能性がある、または、原作者の意図として両方に解されることを意図している場合が少なくない。この場合も、jingleを自動詞と他動詞の両方に解することは出来ないだろうか？ 両方に解した場合、どのような効果が生じるだろうか？

自動詞とは、主語の動作が自己完結的に意識される動詞で、他動詞とは主語の動作が目的語に及ぶように意識される動詞である。“Jingle Bells”において、jingleが自動詞と他動詞の両方に働くことによって、主語が自ら運動するという自動詞のベクトルと、主語の動作が目的語に及ぶという他動詞のベクトルの両方が出現することになる。つまり、逆方向に作用する、相反する2つの統語的momentumが同時に意識されるのだが、それを意識している読者の頭の中では、ちょうど鐘の音が鳴り響くように、syntactic momentumが反響することになる。文法意識が、意味を模倣しているのだ。そもそも、“jingle bells”というフレーズが全ての連の結末部においてリフレインとして用いられていることは、作詞者が、そのフレーズの反復を反響させている何よりの証拠だ。（「鈴が鳴る」と訳していた宮沢章二も堀内敬三も、この部分を「ジングルベル」と訳し、音から意味を剥ぎ取り、この言葉をまるで呪文でもあるかのように扱っているのも興味深い。）

これまでは、各リフレインの1番目と2番目のjingle (= Jingle bells, jingle bells) について述べたのだが、3番目のjingleについては、“jingle all the way”のall the wayが副詞的対格の用法になっている点も重要である。これは、このjingleが自動詞と他動詞の両方の性格を併せ持っている紛れもない証拠である。となると、1番目と2番目のjingleも自動詞と他動詞の両方の性格を併せ持っていると考えられるのも、決して見当はずれではないだろう。これは、単にFuldの解釈というより、作者Pierpontの意図と見做してよからう。

そこで一つの仮説が立つ —— 詩において、鐘や鈴の音の反響を描写する場合、鈴の音を表す動詞を自動詞と他動詞の両義に用いることにより、読者の頭のなかでは、ちょうど鐘や鈴の音が鳴り響くように、自動詞と他動詞の相反するsyntactic momentumが意識される。かくして読者は、意味を模倣した文法構造を意識することで、得も言われぬ快感を覚えるのである。詩的ミメシスの極みといっても過言ではない。

本稿冒頭で挙げたTennysonの例も、実はこの仮説の好例なのかも知れない。入江訳も、半分は正しいことになる。というより、訳す以上はどちらか一方の解釈でしか訳せないわけで、入江直祐は間違っていなかったのだ。

* * *

もし、前述の仮説が成り立つなら、他にも類例があるはずだ。筆者が座右で重宝している参考書にHenry Bohn, ed., *A Dictionary of Quotations from the English Poets* (London, 1867) という引用句辞典がある。Bartlettなどの引用句辞典ほど知られてはいないが、ヴィクトリア朝中期の本で、個々の引用部分もBartlettよりはるかに長く、参考書というより、読んで楽しい引用集の感がある本だ。そのBellsの項には4つの用例が引用されていて、そのうち1つHenry Wadsworth Longfellow (1809-83)の引用が、我々の仮説に符合している（4つのうち1つというのを25%と言い換えて、統計的な強弁をはるつもりはないが、少なくとも「珍しいことではない」と言うことはできるだろう）——

The bells themselves are the best of preachers;
 Their brazen lips are learned teachers,
 From their pulpits of stone in the upper air,
 Sounding aloft, without crack or flaw,
 Shriller than trumpets under the law, 5
 Now a sermon and now a prayer.
 The clangorous hammer is the tongue,
 This way, that way, beaten and swung;
 That from mouth of brass, as from mouth of gold
 May be taught the Testaments, New and Old. 10

Golden Legend, Pt. III (1851)

この引用を最後まで読んで考えるなら、Now a sermon, and now a prayer (6) が、sounding (4) の目的語であることは明らかだ。しかし、読みの行為を時間軸に沿ってたどると、そう簡単には断ずることができなくなる。まず4行目冒頭でsoundingが「鳴り響く」という意味の自動詞として解釈される。次にwithout crack or flawという副詞句が続いていること、さらに5行目Shriller than trumpets under the lawが状況補語のようにつづいていることから、soundingの自動詞としての読みが語法的に補強され、次の6行目の行末まで読み進んだ時点で、文法的に行き場のない2つの名詞句Now a sermon, and now a prayerに関係性をもたせる必要が生じ、soundingを自動詞ではなく他動詞と解釈し直すことになる。この段階で、当初の自動詞としてのsyntactic momentumと、新たに発生した他動詞としてのsyntactic momentumが文法構造を意識している読み手の頭の中で交錯し、反響する。その反響が、鐘の音が説教や祈りとして人々の耳に反響しているのと重なるのだ。これが、時間軸に沿った読みである。

この反響は、文法上の曖昧さから生じたというよりは、時間軸に沿って意識される品詞概念が変化していくことから生じたものである。いずれにしても、自動詞と他動詞のベクトルが問題になっている。

* * *

読み行為の時間軸に沿って、意識される品詞概念が変化する別の例として、Shelley, “Ozymandias”における動詞 survive の例を挙げたい。このことは、筆者自身がすでに2002年の『英語青年』誌上で詳述してあるので、本稿を研究ノートとしたことの気安さから、要点だけを本文として転記する。(但し、原作はsonnetなので、全部引用する。)

I met a traveller from an antique land
 Who said: Two vast and trunkless legs of stone
 Stand in the desert… Near them, on the sand,
 Half sunk, a shattered visage lies, whose frown, 4

And wrinkled lip, and sneer of cold command,
 Tell that its sculptor well those passions read
 Which yet survive, stamped on these lifeless things,
 The hand that mocked them, and the heart that fed: 8
 And on the pedestal these words appear:
 'My name is Ozymandias, king of kings:
 Look on my works, ye Mighty, and despair!
 Nothing beside remains. Round the decay
 Of that colossal wreck, boundless and bare
 The lone and level sands stretch far away.

8行目を、Norton Critical Editionの註釈者Reiman & Powersは、The sculptor's *hand mocked* (imitated and derided) the *passions* that Ozymandias's *heart fed*. と説明している。これは、この箇所が英語母語話者にとっても難解である証拠だが、これだけのことが一読して瞬時に分かるわけではない。この箇所を読みプロセスに沿って詳しく見てゆこう。問題になるのが、「手」と「心臓」が誰のものか、themが何を指すのか、そして何よりも文法構造はどうなっているのか、という点であろう。まず、themは直前の名詞these lifeless thingsとは解し難く、とすればもう一つ前の名詞those passionsを指し、同じthemがfedの後にも略されていると解釈できる。次に「手」と「心臓」だが、themを前述のようにとれば、「手」は石像を彫った石工の手で、「心臓」は欲望を焚きつけたオジマンディヤス王の心臓ということになる。ここまででノートン版の編者のレベルには達した。

残るは文法構造だ。7行目までで「王の欲望が、石という命なきものの上に刻まれて、今も残っている」という意味となり、動詞surviveに関する構造は完結していた。しかし、そうすると8行目の「手」と「心臓」を表す2つの名詞句が文法的に浮いてしまう。これら2つの断片化した名詞句を何とか前の部分とつなげるには、動詞surviveの目的語として解釈する以外に手はない。その場合、意味は「王の欲望 (= 権勢欲) が、命なきもの (= 石) の上に刻まれて、その欲望を侮り摸した (石工の) 手や、(その欲望を) 焚きつけた (王自身の) 心臓より、長く生き残っている」となる。

surviveが、自動詞ではなく他動詞だと分かった時点で読者に課せられた義務は、自動詞と解釈していた時点での意味を、他動詞としての意味に修正する必要が生じることである。初読の読者は、8行目末の時点で、一見、前後の関係性を絶たれた2つの名詞句、しかも手と心臓という肉体の一部を表す語句だけが、ちょうど切断された肉体の一部のように放り出されているのを発見する。それをA survives Bという文法構造のなかに取り込み、「AがBの後まで残る」という意味に解する。すると「後まで残る」主語Aの方が、「先に消滅する」目的語Bより、意味のうえで前面に押し出されることになる。surviveを他動詞として解釈したものの、結局その目的語「石工の手と王の心臓」は、主語「王の欲望」より「先に消滅し」、修辭的残像として残っていたsurviveを自動詞と解していた時の「王の欲望が今も残っている」という意味が支配的となる。断片として存在していた名詞句は、

性を秘めているが故に、主語から目的語に対して及ぶhold「つかんでいる」という動作が双方向に作用して意識され、その分、「厳かな静寂があたり一面を支配している」という意味が強まる、と筆者は考えたい。

*

本稿では、TennysonとPierpontにおける鐘や鈴の音の反響と、文法構造を意識した場合に生じる syntactic momentum の反響から論を起し、仮説を提示し、その仮説を支持するような例を、ShelleyやGrayのなかに探ってきた。これらは、さらに視野を拡げるなら、同族目的語 (cognate object) や副詞的対格 (adverbial accusative) をとる動詞をどうとらえるかという問題に発展していく可能性を秘めている問題であり、この点で斯界の識者のご教示を俟ちたいところである。そして筆者自身、今しばらくは、詩の分野において統語的に反響する鐘探しを継続していくことは当然である。頭の中で意味と文法構造が同時に反響する快感は、詩を専ら読んでいる者にとって、何にも代えがたい至上のものであるゆえに。

¹ 本稿は、平成25(2015)年12月26日に東京大学駒場キャンパスで開催された、斎藤英学塾の月例会における discussant としての発言を修正・加筆したものである。